慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田哲学と私(5)
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	小川, 隆(Ogawa, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.66- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田哲学と私

名誉教授　小　川　隆

三田哲学 33 輯に，心理学における構成の問題（昭. 31. 9.）という論文を載せたのは私が塾の心理学研究室に来て数年後であった．松本正夫先生に勧められてのことであったが，この論文の内容は当時の例会でも講演したものであった．東大の研究室にいた頃，私は心理学の方法論，殊に操作主義に関する論文を専門誌のみでなく，哲学雑誌にも数篇書いていたが，この論文もそうした関心の一環であった．物理学者の Bridgman, P.W. によって提唱された操作主義は新しい行動理論によって改めて心理学の方法論として主張されたが，この背景には論理実証主義などの科学主義哲学がある．塾の哲学には科学主義哲学の基調があり，その点では私は親近感をもって過して来た．

塾の心理学研究室は，横山松三郎先生の下に感覚や知覚を中心にした精神物理学的な実験研究が特色であった．私はそこに新たに動物実験による行動研究を加えようと志した．私が手がけたのはハーバード大学の Skinner, B. F. 教授から送って戴いた所謂，スキナア・ボックスを用いた伝書バトの認知行動に関する実験であったが，停年までこれを続けることになった．哲学 33 輯以後に掲載した論文は，34 輯の伝書鳩のオペラント弁別——刺激継時呈示法における交代時間の影響（昭. 32. 9.）から46 輯の——感性統制下の条件づけ（昭. 40. 2.）までの約 10 年間に 5 篇であった．それ以来，哲学への論文掲載は途絶えてしまったが，これらは総て，スキナア・ボックスによる実験の具体的操作に関する研究であって，私の学位論文の方法論に関する主な部分ともなった．

Psyche の学問であった心理学は，倫理学，論理学，美学などと並んで

哲学の分化であった．しかし，それは Sollen の学としてでなく Sein の学として進展した．19 世紀に入って Sein の学である心理学は自然科学的な方法を用いた実験科学として出発することになった．今日の実験心理学は科学主義哲学との接点を残して哲学との距離を開いている．実験心理学の系統発生をみると，科学的な視点の確立のために物と心，身体と精神，自然と人などの関係に多くの論議が重ねられている．この意味で心理学ほど方法論的論議をする科学もないであろう．私の研究の個体発生も，心理学方法論が最初であった．そして，具体的研究に入ってから段々，哲学から遠ざかったのかもしれない．

来塾した頃の三田山上には未だ，戦争の跡を残していた．その一角にハト小屋といわれていた木造の建物の中で，私はスキナア・ボックスの実験をはじめた．この小屋も停年間近には小規模ながら立派なコンクリートの実験室に改築できた．その少し前，塾で日本心理学会の大会を催すことになり，Skinner 教授を招いて講演会を開き，同時に塾の名誉学位を授与することになった．今年 8 月，教授は亡くなられたが，ハト小屋の実験と，ある時期，哲学に載せた一連の論文とは，私の塾在職中の切り離せない想い出となっている．